

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

⑥その他

《人社系》

●神戸大学人間発達環境学研究科

「正課外活動の充実による大学院教育の実質化」の事例

(具体的に何を実施したのか)

自領域の専門性を活かすだけでなく、他領域の専門性を理解し、現実生活において実践者と協調し得る「実践的研究者」の育成をめざして、大学院生が、自領域だけではなく、他領域における正課外活動（企業・行政・NPOにおける活動への参加、あるいはそれら各組織と大学との協働的な場面への参加、学外の学術活動への参加、教員の学内活動への補助的参加）を行い得る仕組みを創成した。具体的には、本研究科関連の活動メニューを「正課外活動スケジュール」として掲示するとともに、それへの誘導的事業として「オリエンテーション合宿」「インシヤルプログラム」「活動デザインワークショップ」などを実施した。そして、それらが院生の専門教育と連動して意味あるものになったかを院生自身が判断するために「リフレクティブプログラム」を実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

院生側の主体性・自発性を尊重し誘発するために、各領域の院生の代表をメンバーとする「ヒューマン・コミュニティ創成委員会」を創設した。また、NPOや学外協力団体の理解を得るために、学外協力者ミーティングを頻繁に開催するとともに、教員やスタッフが院生とともに活動に参加するというを行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

人間発達環境学研究科は、文理融合型の新しい組織であるため、院生の専門的な活動についての院生の間での相互理解が乏しかった。それぞれの領域に関連している実践活動・学術活動などに異なる領域の院生が補助的に参加することによって、自領域の専門性をより明確に理解するようになったり、他領域と自領域の関連性を実感するということが生まれた。また、実践に資する学問の意味を深める契機ともなった。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

F. その他

②国際シンポジウム等の開催

《人社系》

●神戸大学人間発達環境学研究科

「正課外活動の充実による大学院教育の実質化」の事例

(具体的に何を実施したのか)

ESD や融合領域の可能性を探索する国際シンポジウムを、助成期間中、頻繁に実施した。イギリス・ロンドン大学、バングラデシュ・グラミン銀行、ユネスコ・バンコク事務所などの協力を得て、学術・実践の視野を世界に広げる取組を実施した。院生が、その企画立案・運営・報告評価の全プロセスで主体的なスタッフとしての役割を果たすように促すとともに、正課外と正課教育の連結、自領域と他領域の協働が、どのような新しい可能性を生むことになるのかを省察する場として、「リフレクションプログラム」を実施した。ファシリテーターは教員が行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

企画立案の過程で、なるべく多様な専門の院生が集まり、複合領域のシンポジウムになることを目指して、複数の教員が世話人・進行役になるように配慮した。院生の素朴な疑問やアイデアを大切にするために、博士課程の院生が進行役を進んで行えるような雰囲気作りを心掛けた。また、ファシリテーターは教員が務めたが、教員以外のスタッフによってサポートされるプログラムを準備した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

シンポジウムの準備・運営・評価の全プロセスに参加することによって、院生が学術・研究の組織化の方法を体験することができた。また、そうした活動のなかで、他領域の人間との有機的なつながりが生まれたり、他領域の問題設定と自領域の研究枠組みとの関係性をさぐる機会となったようである。また、スタッフとして院生たちと動いた教員たちのなかに、一体感が生まれ、その後の共同研究の人的組織化の基礎にもなった。